立川「秘密」の舞台

文人の武蔵野

松本清張 ⑤

松本清張(1909～92年)の「ゼロの焦点」は、昭和30年代のベストセラー小説です。北陸(金沢・能登)に観光客を動員し、作品の舞台を訪ねることを楽しむ〝聖地巡り〟の端緒となり、また映画「ゼロの焦点」(昭和36年)における断崖絶壁のシーンは、テレビのサスペンスドラマの演出パターンになります。

「ゼロの焦点」には、北陸とともに武蔵野も描かれています。「赤い服装をした若い女がアメリカ兵を連れて」仲睦まじく英語を喋りながら農家を改造した家に住んでいる。家の周囲には防風林があり、「その木立の隙間からは、武蔵野の広い畑の縞がひろがり」る。そんな風景がみられる当時の立川には、実際に英語を操り米兵と交際をする「赤い服装をした若い女」がいました。やむなく糊口を凌いでいた女性たちの中には、作中と同様に過去を隠して「上流婦人」になった者がいたかもしれません。そのような過去は、当時の価値観では一生守りたい秘密だったのでしょう。清張の立川は、「武蔵野台地」の「北の端」に位置する武蔵野であり、秘密の物語の原点となる場所でした。

立川市内で買い物をすませ散歩する米兵たち(昭和30年頃、立川市歴史民俗資料館提供)

〝武蔵野の雑木林〟があり、飛行場の建設費が節約できる要地であることにより、立川は大正期に防空拠点となります。昭和に入ると中島飛行機武蔵製作所とともに軍都武蔵野を誇り、米軍機の標的になり民間人も空爆されます。敗戦後は進駐軍に制圧されて基地の街ができて街娼が生まれました。

立川(=武蔵野)における個の記憶は封印され、事件の動機はベールに包まれます。「ゼロの焦点」は、なかったこと(「ゼロ」)として扱われた〝武蔵野の記憶〟に焦点をあてた戦後文学だと言えます。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

(新潮文庫)

「ゼロの焦点」

「ゼロの焦点」は、雑誌「太陽」に原題「虚線」として連載(昭和33年1月～2月)されますが、「太陽」の廃刊により中断。江戸川乱歩が編集長をしていた「宝石」(昭和33年3月～35年1月)に引き継がれて連載が完結します。1971年に新潮文庫版が刊行されて以来、133刷(平成30年)を数えています。

武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

■ あすの暦

10月10日(日曜日)
旧 9月5日<先勝>

通日 283
月齢 3.7
(正午)

=東京標準=

日出 5.43	満潮 7.34
日入17.13	18.39
月出 9.49	干潮 0.58
月入19.51	13.14
	(中潮)